

アマチュアのシニア・アンサンブル団員における音楽的ライフストーリー — 1998年と2013年調査の音楽的態度の比較検討 —

丸林 実千代
(日本女子大学)

【要旨】

近年、音楽活動の中でも器楽演奏に携わるアマチュアの中高年は増加している。筆者はXシニア・アンサンブルという器楽合奏団に対して、1998年に調査を実施した。そして15年後の2013年に再調査を実施したところ、団員の音楽的態度に変化が見られた。

そこで、本論文はその変化の要因について、音楽的ライフストーリー調査から考察を試みた。そして、①戦争との関連、②幼少期から現在までの音楽的経験、③本団体での指導者との関係、に焦点化し検討・考察を行った。最後に、個人の音楽的ライフストーリーを丁寧に読み解くことにより、人々を取り巻く音楽的事象に新たな解釈を与えることが可能となること、また生涯学習社会における(音楽の)学習者理解について論じた。

1. はじめに

人間は音・音楽と関わり生活を営み続けている。そして音・音楽との対話により美的情動が揺さぶられ、その経験の積み重ねにより美的情操を形成している。人間の音楽的成長とは、このような美的情操の形成を中核(あるいはその一側面)として解釈される。そこで、生涯学習社会の認識が浸透した現代日本において、音楽活動を行う人々にとって、音楽を単に「人生を豊かにするもの」や、「生活の楽しみ」などの表現でとらえることは、極めて表層的であると思われる。生涯学習社会では、人間が音・音楽と美的対話を繰り返し、自己形成しているという考え方を枢要とし、人々の音楽活動を把握し、検討・考察することが求められるであろう。

日本において余暇として音楽に積極的に関わる人は多い。2013年1月実施の調査¹⁾によると、2012年の参加人口はコーラスが290万人、洋楽器の演奏が920万人とされている。このようにコーラスという歌唱活動よりも、器楽演奏のほうが多くの人々に支持されている。また、2003年から2012年の参加人口の推移で、洋楽器の演奏は680万人から920万人へと増加している²⁾。そして、2002年から2012年の参加率の比較では、60歳以上の男女とも上昇した種目の第1位に洋楽器の演奏があげられている³⁾。このように近年では、楽器演奏に取り組む中高年が増加しているのである。

しかし、これまでの音楽分野で中高年を研究対象とした場合、音楽療法の領域での研究が大部を占めている。ここでは療法という性質から、中高年の認知症対策や健康維持を目的とした音楽活動が取り上げられており、中高年の音楽活動を生涯学習として把握しようという積極的な意識は見受けられない。そこで、生涯学習として音・音楽と対話し続けている中高年の実態把握は、いまだ残された課題であると言える。

2. 研究の目的および方法

(1) 研究目的

本論文は、アマチュアのシニア・アンサンブル団体に対し 1998 年と 2013 年に調査を実施し、団員の音楽的態度⁴⁾の実態把握をするとともに、15 年間の変化について検討し、生涯学習社会における音楽活動のあり方について考察することを目的とする。

(2) 研究方法

1) 調査対象

本論文冒頭で述べたように、現在の日本では器楽演奏人口が多い。そこで今回の調査では、X シニア・アンサンブルという中高年の合奏団を取り上げる⁵⁾。多くのアマチュア音楽団体が活動の過程で分裂や統合、そして時には消滅してしまうが、この団体はアマチュアの器楽アンサンブルとして 20 年以上も活動を継続している。また筆者は、この団体に対して 15 年前の 1998 年に調査を実施している⁶⁾。そしてその後、健康など様々な理由から団員が入れ替わったため、2013 年に再調査を実施し、中高年の音楽活動者の実態把握を試みることにした。

2) 研究方法

本研究では、第一段階として自由記述を多用した質問紙による調査を実施する。そしてその結果を踏まえ、第二段階として団員に対する音楽的ライフストーリー調査を行う。今回は音楽を中心に人生を振り返り、そして現在の音楽活動や今後の音楽活動についても語っていただいたため、本論文ではこの調査を「音楽的ライフストーリー」と称する。

今回の音楽的ライフストーリー調査の手順は、表 1 の通りである⁷⁾。そして、調査結果は紙幅の都合上、2 名ずつ事例として取り上げ、①戦争との関連、②幼少期から現在までの音楽的経験、について検討を行う。そして次に、前出の質問紙調査と音楽的ライフストーリー調査から、③本団体での指導者との関係、について検討・考察を試みる。

表 1 音楽的ライフストーリー調査の手順

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 質問紙調査 (自由記述)2. 個々人の年表作成3. インタビューの依頼 (個人情報保護、研究倫理遵守の説明)4. 個人の履歴表作成の依頼 (出生地・居住地、学歴、職歴、結婚、家族構成、
その他人生の大きな出来事など)5. インタビュー (資料をお互いに見ながらライフストーリーを語ってもらう。録音、同時にメモ)6. トランスクリプション7. 電話やメール、手紙、FAX などでの再確認8. 音楽的ライフストーリーの構成9. 協力者への確認 |
|--|

3. 調査結果(1):質問紙調査

1) 団体の概要

この団体の特徴と団員の意識の概要を把握するため、第一段階として自由記述の多い質

問紙調査を行った⁸⁾。

表 2 団体の概要 (1998 年と 2013 年調査の比較)

	1998 年調査	2013 年調査
団員数	25 名	24 名
男/女	男性 13 名/女性 12 名	男性 8 名/女性 16 名
平均年齢	66.4 歳	68.5 歳
質問紙回収 (回収率)	20 名 (80.0%)	20 名 (83.3%)
楽器構成	弦楽器、鍵盤楽器、打楽器、 木管楽器	弦楽器、鍵盤楽器、打楽器、 木管楽器、金管楽器

この表 2 は、質問紙調査で確認された団体の概要である。1998 年当時の団員は 25 名、2013 年は 24 名であり、そのうち 4 名が同じ団員である。つまり、15 年の間に 21 名が入れ替わったことになる。男女比は、1998 年がほぼ同数であったのに対し、2013 年では女性が男性の 3 倍になっている。平均年齢や回収率に大きな差異は見られない。楽器構成では、2013 年に金管楽器が加わっている。またここには表記しなかったが、2010 年ごろに指導者 (指揮者) が変更されている。

2) 団員の音楽的態度の傾向

ここでは「X シニア・アンサンブルで、今後どのような音楽活動をしていきたいですか?」「自宅練習で工夫していることはありますか?」の質問での自由記述と、自宅の練習頻度に関する質問を中心に、団員の音楽的態度の傾向を把握したい。その結果は表 3 と表 4 の通りである。

まず、1998 年の団員であるが、表 3 から音楽の細かな趣向や、留意点について、個々人が意識を強く持っていることが分かる。そして、非常に熱心に練習する姿や、この団体に対する積極的な音楽的態度がうかがわれる。

反対に 2013 年の団員には (表 4)、音楽について具体的な意見は一切見られず、現状維持や、消極的な態度が読み取れる。さらには、これらの質問について自由記述部分に未記入 (白紙) が 8 名もいた。1998 年調査で未記入者は 0 名であり、全員が何らかの回答を記述していた。

このような 15 年間の音楽的態度の変化は、自宅練習の頻度にも明らかに見られる。表 5 から、1998 年では自宅練習を熱心に行っているが、2013 年では、あまり行わなくなっていることが明らかである。また自己練習の工夫について (表 3 と表 4)、1998 年では個々人が様々に工夫をしており、そこには熱心に音楽に取り組み、それぞれが音楽と対話しながら、自分なりの音楽美を追求しようとする姿勢がうかがわれる。しかし、2013 年は練習の工夫について未記入が 20 名中 12 名もおり、この団体に対する音楽的態度に積極性は読み取れない。

ではなぜ、このような団員の音楽的態度の変化があったのであろうか。この変化の要因を追究するには、団員一人ひとりを質的調査することが必要となるであろう。

表 3 1998 年団員の音楽的態度

- ・もう少し中低音楽器を加えてハーモニーに厚みを持たせたい。(合唱や独唱)を加える。ポップス系の曲を増やしてほしい。(63歳・男性)
- ・自宅での練習回数を多くして、1音でも違う音を出して、皆さんに迷惑をかけないように演奏できるようにになりたい。初めての曲は子どもにエレクトーンで弾いてもらい、それを録音し、何度も聴いて覚え、録音に合わせて繰り返し練習し、できるようになるまで練習はやめないようにしている(69歳・女性)
- ・合奏を中心に考え、まずリズムを指揮に合わせて乱れないこと。曲に強弱をつけて表情を豊かにする。指揮者から注意されたことを、次回までにできるよう努力する。(70歳・男性)
- ・自分たちの演奏が向上し、聴いていただける方を元気づけられる演奏ができるならばいろいろな場所に出向き演奏したい。練習では間違えないように、色々と楽譜に書き込んでおき(自分で色や○、矢印をつけたり)、常に自分の演奏力の向上を念頭において練習する。(47歳・女性)
- ・全体合奏の他、部分的に小合奏を併用すると楽しさは倍加、コンサートも面白くなると思う。国内外のアンサンブル団体と一緒に合同演奏をしたい。(63歳・男性)
- ・#や♭がついた音を間違えやすいので、他の人に迷惑かけないように音符に色をつけている。自分のミスで練習中に曲が止まったりしないよう、毎日4時間以上は練習するようにしている。(61歳・女性)
- ・現在のレパートリーの他に、ポピュラーやジャズにも増やし多くの曲に挑戦したい。私のパートは音が大きく、自宅では練習でいらないため、貸しスタジオを借りて個人練習して、自分の演奏能力の向上に努めている。(61歳・男性)
- ・もっともっと曲の雰囲気合った音色が出せるようになりたい。自分たちの演奏を客観的にビデオやカセットテープを利用して何度も何度も聞き、今後の演奏に役立てる。特に自分の楽器については注意して聞き、自分が理想とする音に対してどうであるか反省材料とする。お客さんの演奏会でのアンケート等を読んで、一人ひとりの微力が他人に感動や勇気を与えるなど役立っているんだ。もっともっと腕を上げていかなければいけないと考えるようになった。(71歳・女性)

表 4 2013 年団員の音楽的態度

- ・どのような活動というよりは、今の健康状態を保って、いつまでやれるか・・・(75歳・女性)
- ・年に数回のボランティア演奏をするくらいでいいと思う。(76歳・女性)
- ・皆で楽しく演奏できれば、それでいい。(69歳・女性)
- ・高齢のため、あまり複雑なリズムの曲は無理だと思うので簡単な曲をやって欲しい。(80歳・男性)
- ・認知症にならないために音楽をしている。(63歳・女性)
- ・残り少ない時間を仲よく過ごす。(69歳・女性)
- ・隔年の定期演奏会と、当団で老人ホーム4ヶ所、・・・今後もこのペースで活動を続けられれば良いと思う。(66歳・女性)

※未記入8名。

表5 自宅練習の頻度（単位：人）

	1998年	2013年
毎日練習する	16	2
週5日ほど練習する	3	2
週3日ほど練習する	0	5
週1・2日練習する	1	9
自宅練習はしない	0	2

4. 調査結果(2): 音楽的ライフストーリー調査

(1) 戦争との関連、幼少期から現在までの音楽的経験

音楽的ライフストーリー調査では、協力者に関する膨大な情報を得ることができた。以下には、その中から論文掲載に同意を得られた4人の事例を記す。紙幅の都合上、協力者の簡略化した履歴表を提示し、その下に戦争との関連幼少期から現在までの音楽的経験に関連するライフストーリーを記す。

1) 1998年の団員

表6-1 Aさん（当時86歳・男性）

1912（明治45）年生まれ。最終学歴：小学校卒業。
 16歳：青年団でハーモニカ合奏団結成（趣味程度）。
 17歳：憧れのヴァイオリンを小遣いで購入。以後、独学で練習。
 19歳：満州事変以後、3回の徴兵。
 21歳：戦争で聴覚を負傷（右耳完全に聴覚を失う。左耳の聴覚は半分ほど）。
 20歳くらいから70歳まで、生活のため仕事に忙殺される。この間、一切音楽はできなかった。
 音楽に憧れ続ける。
 70歳：退職後、市民オーケストラに入団。演奏能力不足のため、退団を余儀なくされる。
 80歳：Xシニア・アンサンブル入団。

彼は明治45年生まれ、時代背景や経済的理由から小学校しか出られなかったと言う。そして、3回の徴兵を経験している。親からもらう小遣いを貯め、17歳の時に憧れのヴァイオリンを購入したそうだが、徴兵のためヴァイオリンを弾く余裕はなかった。また、21歳の時、戦争で聴覚を負傷し、インタビューを実施した1998年には、ほとんど聴こえない状態であった⁹⁾。彼は、20歳くらいから70歳まで、生活のため、家族を養うため、仕事に忙殺された。本当に貧しく苦しい生活だったと述べていた。音楽をやりたい、ヴァイオリンを弾きたいと思いつつも、そのような時間は一切なかったそうだ。そしてそのような状況が続けばつづくほど、音楽への憧れを強めていったと言う。70歳で退職し、市民オーケストラに入団するも、ヴァイオリンが下手で他の団員から嫌がらせを受け、退団を余儀なくされた。そして80歳になり、このXシニア・アンサンブルに入団し、やっと自分の音楽的居場所を見つけたと言う。彼は、コツコツと貯めた貯金をはたいて100万円のヴァイオリンを購入していた。それについて、彼は「皆は、もっと上手になってから高い楽器を買えばいいのに。今は下手なんだから安いのでいいじゃないか、って言うんですよ。でも、いつ上手になるのか分からない。その前に死んじゃうかもしれない。たぶんもうこの年だし、耳も聴こえないから上手にはならないですよ。今まで貧乏で我慢して我慢して苦労してきたんだ。人生で一回くらい贅沢したって、バチは当たらないと思うんですよ。

これまでは家族のためにお金を使ってきたけど、これからは自分のためにお金を使うんだ。」と訴えるように語ってくれた。

表 6-2 B さん (当時 77 歳・男性)

1921 (大正 10) 年生まれ。小学校の時から音楽は好きだった。

10 歳：ハーモニカを吹く。

13 歳ころ：友人からアコーディオンを借りて楽しんだ。中学卒業後、徴兵。

終戦後、就職したが、貧しく仕事に忙殺される。しかしアコーディオンへの憧れが強く昼食を抜き、お金を貯めて 40 歳で自分のアコーディオンを購入したものの、忙しく演奏することはほとんどなかった。

60 歳：鍵盤楽器への思いが強く、我流の演奏を反省し、電子オルガンを習う。だが先生が厳しく、上達もせず挫折した (この間アコーディオンは弾かず)。

70 歳：X シニア・アンサンブル入団、念願のアコーディオン担当。

75 歳：体調を崩し入院、手術。

76 歳：右手の後遺症のため、アコーディオンが持てず、キーボードに担当を変更し、左手だけで演奏している。

B さんは、幼いころから音楽が好きだったと言う。特に鍵盤楽器に興味があり、アコーディオンに強い思いを持っていたそう。中学卒業後、徴兵され、終戦後、就職したが、貧しく仕事に忙殺された。しかし、その期間もアコーディオンへの憧れを強く持ち続け、昼食代の 50 銭を貯め、40 歳で自分のアコーディオンを購入した。だが、働くのが精いっぱいアコーディオンは押入れの中に入れてままだった。60 歳で退職し、電子オルガンを習うものの、先生が厳しく、またグレード試験では一番下の級にも 2 回落ち、挫折して止めてしまった。そして 70 歳の時にこのアンサンブルに入団し、念願のアコーディオンを担当することになった。不運にも 75 歳で体調を崩し、手術を受け、その時に右手に後遺症が残ってしまった。このアンサンブル団体に復帰したい一心で、リハビリに励んだと言う。しかし、アコーディオンは重たく、両手を使うことが無理になり、それでもこの団体に演奏を続けたいと、キーボードに変更し、指導者に左手だけのパートに編曲してもらい、演奏をしている。

2) 2013 年の団員

表 7-1 C さん (79 歳・女性)

1933 (昭和 8) 年生まれ。服飾関連の専門学校卒業。

小学校長の父親、裕福な実家出身の母親のもとで育つ。

8 歳：第二次世界大戦開戦。疎開するが、校長の娘ということで、虐められることもなく大切にされた。戦争に関しては嫌な思い出は一切ない。

20 歳：就職。26 歳：結婚、2 児を授かる。42 歳：再就職、58 歳：退職。

20 歳：地域の合唱団入団。

22 歳：マンドリンを習う。結婚まで歌声喫茶やタンゴ生演奏を聴くこと、社交ダンスに熱中。

34 歳：息子の PTA コーラス入団。

37 歳：転居先で地域の合唱団入団。

58歳：さらにもう一つの合唱団に入団。同時に有志で合唱団を立ち上げる。

65歳：Xアンサンブルに入団したく、マンドリンを再度習いだす。

68歳：Xアンサンブル入団（現在に至る）。

76歳：ハンドベルのサークル入会。Xアンサンブル以外にもボランティアでマンドリンの活動を開始し、継続中。

Cさんは、小学生のころ戦争を体験しているが、戦争に対して嫌な思い出は一切ないと言い切る。父親が小学校の校長で、母親の実家が大きな神社で裕福であったため金銭的な苦労はなかった。また戦時中、疎開したが、その地でも校長先生の娘ということで虐められることもなく大切にされた。彼女は幼いころから音楽は好きであったが、これといった習い事はしなかった。しかし、彼女の20代は、古賀政男メロディ、明治大学に代表されるマンドリン倶楽部、そして「うたごえ喫茶」が流行した時代で、会社帰りにマンドリンを習い、歌声喫茶、タンゴ演奏、社交ダンスに通うなど、当時の流行に乗り自由を満喫していた。さらに、20歳を過ぎたころから、職場、PTA、地域など様々な場面で合唱団に入る。複数の合唱団に掛け持ちで入っていた期間も長い。この時期、日本は高度経済成長であった。そして現在、このXシニア・アンサンブル以外にも、複数の合唱団やハンドベルの音楽活動を行っている。また趣味も多く、美術館、映画館、コンサート、編み物教室、料理、スポーツ、旅行など、外に出掛けない日はないくらい活動的な日々を過ごしている。彼女にXシニア・アンサンブルの今後について聞いたところ「皆で仲良くやればばいいんじゃない？他のことが忙しくて、あまり深くは考えていないわ。」とのことであった¹⁰⁾。

表7-2 Dさん（69歳・女性）

1943（昭和18）年生まれ。高等学校卒業。

2歳：終戦。

4歳：父親病死。以後、高校卒業まで母子家庭、7人姉妹で経済的に苦しい生活を送った。進学校であったにも関わらず大学進学は諦めざるを得なかった。幼い時から童謡歌手に憧れ、小中高とコーラス部。ピアノが習いたかったが、経済的にできなかった。

18歳：就職。社内のコーラス部参加。

23歳：結婚、2児を授かる。夫の仕事により経済的に裕福になる。

28歳：夫の転勤のため台湾転居、エレクトーンを習う（29歳帰国）。

30歳ころ：ヤマハのエレクトーン講師資格取得。以後、エレクトーンを教え、収入を得る。
地域のコーラスに入団。

39歳：夫の転勤のためLAへ転居。ジャズ（歌唱）を習う。日系の合唱団在籍。

44歳：帰国。通信教育で教員免許（英語）を目指し、49歳で取得。

46歳：国内で夫が転勤、その地で大正琴を習う（53歳まで）。

地元のコーラスに入部し、指導者にオペラを習う。

49～54歳：転勤で地元に戻り、またコーラスに入団し、指導者にオペラを習う。

53歳～現在：有志で手話コーラスを立ち上げ（リーダー）、ボランティアで活動。

55歳～現在：TV番組企画に応募し、素人バンドのメンバーに選ばれ、ベースギターに取り組む。

56歳～現在：オカリナを習い、現在は指導もしている。

57歳：Xアンサンブル入団。

63 歳～現在：友人たちと歌唱を中心としたライブ活動。

69 歳：自分の古稀（70 歳）記念として、コンサートを企画（2013 年 11 月 28 日）。

D さんの音楽的ライフストーリーは経験豊富で、情報も膨大なものとなった¹¹⁾。

彼女は 2 歳で終戦を迎えるが、戦争よりも父親を 4 歳で亡くしたことが、青年期までの経済的に厳しい生活に強く影響している。幼少期は、小鳩くるみなどの童謡歌手に憧れ、歌うことが好きであり、そのため小中高等学校ではコーラス部に所属していた。彼女の人生の転機は結婚である。経済的に安定した夫と結婚し、その後、台湾や LA などの海外転勤に帯同し、裕福な海外生活も経験し、その地で音楽を楽しんでいた。その期間、エレクトーン、ジャズ、コーラス、オペラ、大正琴など積極的に取り組んだ。

50 歳以降からは自分で立ち上げた音楽活動もあり、現在継続中の活動も複数ある。それらは、手話コーラス、ベースギター、オカリナ、歌唱などである。X シニア・アンサンブルには 57 歳から加入し、ドラムを担当している。そして自己の 70 歳の古稀の記念として、コンサートを自主開催するというほど、精力的に音楽活動を行っている。彼女に今後の X シニア・アンサンブルでの活動について聞いたところ「いつ辞めようかと考えているの。もう 70 歳だし、色々な活動を整理しようと。これからは手話コーラスに重心を置きたいの。このシニア・アンサンブルはつまらないのよ。」とのことであった。

(2) 本団体での指導者との関係、指導者への意識

このアンサンブル団体は、発足当時から約 16 年、同じ指揮者に指導を受けていた。しかし 3 年ほど前（2010）に様々な事情から指導者が変わった。ここでの指導者とは、この団員の楽器構成や、演奏技術に合わせて楽曲の編曲を行い、そして指揮者として団員の音楽指導を行う立場の者である。では以下に、1998 年団員と 2013 年団員の意識を検討していきたいと思う。表 8 と表 9 は、音楽的ライフストーリー調査のインタビューで得られた情報を中心に構成した。

1998 年の団員は（表 8）、指導者からの厳しい音楽指導、しかしながら先生の美しい音楽の世界を実感し、それに憧れを抱き、その音楽に向かって熱心に練習する様子が語られていた。本調査において、指導者について全否定する意見は皆無であった。

そして 2013 年は（表 9）、指導者への不満や違和感が語られている。本調査（質問紙とインタビューとも）では、指導者に対する質問に無回答が多かった。

表 8 1998 年団員の指導者との関係、指導者への意識

- ・あの先生はねえ、本当に厳しいんですよ。気になる点があると出来るまで何度も何度も一人を攻撃してやり直しさせるんです。たまに涙が出ちゃうときもあるくらい……。でもね、あの先生の編曲する曲は本当に素敵なのよ。先生の音楽に近づきたいなっていつも思っているの。だから毎日練習するし、上手になりたいなって思うの。（58 歳・女性）
- ・先生が目指す音楽に、私なんかには到底追いつけないとはわかってるの。でも、皆で上手に出来た時の美しい音色が忘れられなくて。どんなにきつく注意されても、それは私が出来なくて悪いんだから。次の練習日までには同じことで注意されないよう、毎日練習しています。（71 歳・女性）
- ・本当に厳しくて、練習中はおっかないですよ。こっちが素人だっというのに、妥協がないんです。しかし、あの先生の音楽は綺麗で、繊細で……。魅かれるというか……。 （67 歳・男性）
- ・団員の出入りが多いから（健康上の理由など）、楽器の編成が変動的でしょ。でもそれでも上手く

演奏出来るように、先生が編曲してくれていて、私たちでもできるレベルになっているんですよ。
あの先生の音楽はいいですよ。(71歳・男性)

表9 2013年団員の指導との関係、指導者への意識

- ・こっちが素人で、上手じゃないことは分かっているけど、出来ないところがあると「もうそこは弾かなくていい」と言われたわ。がっかりしちゃってやる気がなくなるのよねえ。(69歳・女性)
- ・皆で話し合っただけで「この曲がやりたい」と決めても、「皆には無理だ」と先生に却下されるんですよ。それを繰り返しているから全体の士気が下がるし……。あと、同じ曲ばかりやっていて、先の演奏会のことを考えて、もっと計画的に練習することをしてくれないと……。(70歳・男性)
- ・皆でやりたい曲を決めても、先生が編曲すると、皆のイメージと違うふうに出て上がってくることが多い。でも、こちらは素人だし、そんなことは先生には言えない。(69歳・女性)
- ・近年は、レベルが低下してきていると思う。先生が私たちのレベルに合わせようとして、どんどん音を削ってしまうから。だから家でも練習しようという気にはなれない。(66歳・女性)
- ・素人の私が言える立場ではありませんが、正直「なんで先生はそこの部分にこだわるかな？」と練習中に思うことが多い。(66歳・女性)

5. 質問紙調査と音楽的ライフストーリー調査を通しての考察

(1) 戦争との関連、幼少期から現在までの音楽的経験

1998年の団員は、戦争経験者が多く、その後の生活に強い影響を与えていると言える。経済的に厳しい人生を歩んで来ており、その間、音楽活動に強い憧れを抱くも、実現しなかった。また、複数の音楽活動に興味・関心を持つ機会もなかった。このような人生の長い期間中、音楽への欲求が蓄積し高まり、定年後には過去を取り戻すがごとく、反動的にこの団体での音楽活動に傾注している。そして、彼らにはこの団体が唯一、もしくは数少ない音楽活動となっているため、この団体での音楽活動に専心し、非常に積極的な音楽的態度で臨んでいると考えられる。

一方、2013年の団員は幼少期に戦争を経験している者も多いが、あまり負の影響は受けていない。その後、高度経済成長期などの豊かな時代の恩恵を受けながら、様々な音楽活動やその他の活動を行う余裕があった。そして、Xシニア・アンサンブルは、現在行っている様々な活動の一つであり、複数の活動に意識が分散化している。そのため、1998年団員ほどの積極的な音楽的態度は見られないと推察される。

(2) 本団体での指導者との関係、指導者への意識

1998年当時の指導者は、大変に厳しく、その指導方法に疑問を持たれることもあるが、音楽的に尊敬されていた。そのため団員は、指導者の音楽に近づきたいと積極的に練習し、このアンサンブル団体の活動に専心していたと考えられる。

2013年の指導者は、団員の音楽レベルを考慮し、無理はさせない方針のようである。また、目指す音楽的方向性に違和感を抱く団員も多い。そのため自宅練習が減少し、このアンサンブル団体での音楽活動に団員が閉塞感を感じているようである。

これらの差異を表層的に解釈すると、以前の指導者が優秀で、現在の指導者が不適任と判断されるであろう。しかし、これを団員の音楽的ライフストーリーから再検討すると、異なる解釈もできると考える。つまり、1998年の団員は、入団まで音楽経験の希薄な人生

を過ぎしてきた。そのため、これまでに音楽に対する多様な価値観や、音楽の審美的基準を形成することや、柔軟な音楽的思考をめぐらすことができなかつたとも推察される。したがって、唯一もしくは数少ない音楽活動の場であるこの団体に没頭し、そして一人の音楽指導者を無条件に信奉してしまうという音楽的態度をとっているとも考えられる。

これに対して 2013 年の団員は、これまでに豊かな音楽経験、その他にも多種多様な文化的経験を積んできていた。そのため、音楽に対する独自の審美的基準が自然に備わり、また音楽に対する多様な価値観、柔軟で自由な音楽的思考を形成していることも推察される。そこで、現在のような音楽的態度がとられ、音楽指導者への厳しい評価がなされているとも考えられる¹²⁾。このように個人の音楽的ライフストーリーを丁寧に読み解くことで、人々を取り巻く音楽的事象に新たな解釈を与えることが可能となるのである。

6. まとめ

団員に対する音楽的ライフストーリー調査によって、15年の間に構成する団員が入れ替わり、その音楽的態度や意識に変化が見られた。団員のそれらには、これまでに歩んできた人生が反映されており、また自己が置かれた状況（環境）に強く影響を受けながら音・音楽と対話してきている様子が見えてきた。

現在の生涯学習社会において、人々の音楽活動をとらえる場合、音楽活動者を歴史的・文化的・社会的など多くの要素を包含した個人の背景とともに解釈することが求められるであろう。そしてそのような音楽活動者が、音・音楽と美的対話をしながら自己形成していくための生涯音楽教育論・生涯音楽学習論がさらに深められなくてはならないと考える。

【注記・引用文献】

- 1) 『レジャー白書 2013 やめる理由 はじめる理由—余暇活性化への道筋』公益財団法人日本生産性本部、2013
- 2) この調査では 2009 年より訪問留置法からインターネット調査に移行したため、特に 2009 年が複数の項目で参加人口、参加率などピークの数値になっている。
- 3) 2012 年の参加率が 10%未満の種目において。
- 4) 音楽的態度(musical attitude)という語は研究者によって多義的に用いられている。本論文では、音楽活動者の音楽に対する意識・行動・信念・価値観などを総称する術語として用いる。
- 5) 協力者の個人情報保護のため、本稿ではこの団体の所在地も伏せることにする。
- 6) この調査結果は、拙著『生涯音楽学習入門』音楽之友社、1999、「第 8 章 生涯音楽学習と高齢者の音楽活動」pp.115-130 に掲載してある。
- 7) この手順の「5」以下の作業であるが、2013 年調査では IC レコーダー 3 台を用いた。1998 年は、当時のインタビュー・データがカセットテープで現存していたため、それを当時のトランスクリプトとともに聞き直し、今回の研究目的に合わせて再構成した。1998 年当時も確認のため、協力者に複数回の電話連絡を行っている。
- 8) 両年とも留置法であり、1998 年 7 月 19 日～8 月 2 日、2013 年 8 月 4 日～11 日実施。
- 9) A さんとは、実際に会い対面調査も行ったが、聴覚障害のためインタビューが不完全であった。電話連絡も不自由であったため、複数回の書面（手紙）によるやり取りで調査を行った。現在（2013 年）は故人。
- 10) 2013 年 10 月 21 日（月）10：00～12：30 に、C さん自宅近くのファミリー・レストランで集中的にインタビューを行った。
- 11) 2013 年 8 月 4 日に質問紙調査を依頼した以後、半年ほど複数のメールでの情報交換を行った。インタビューは 2013 年 10 月 18 日（金）14：00～17：00 に D さん自宅近くの喫茶店で集中的に行った。
- 12) これらの要因の詳細な分析は、ライフストーリーをコーディングするなどの手法を用いて、別の機会に詳細に行いたい。